



令和 5 年 7 月 1 2 日

令和 4 年度「全国学生調査（第 3 回試行実施）」の結果をお知らせします

文部科学省では、中央教育審議会答申で提言された全国的な学生調査の実施について、令和 4 年 11 月 28 日（月）～令和 5 年 1 月 20 日（金）の間、国立教育政策研究所と共同で、全国の大学生を対象とした大規模なアンケート調査を試行実施し、10 万人を超える多くの学生から回答をいただきました。

今般、その結果を取りまとめましたので公表します。

1. 趣旨目的

「全国学生調査」は、「学修者本位の教育への転換」を目指す取組の一環として、全国共通の質問項目により、学生目線から大学教育や学びの実態を把握し、大学の教育改善や国の政策立案など、大学・国の双方において様々な用途に活用することを目的としている。

本調査は、令和元年度の第 1 回、令和 3 年度の第 2 回試行実施に引き続き、適切な調査方法や質問項目などを整理・検証するため、試行という位置付けで実施したものである。

2. 調査内容**（1）調査対象**

試行実施に参加意向のあった 532 大学^{※1}に在籍する学部 2 年生（約 46 万人）及び 4 年生等^{※2}（約 49 万人）、並びに参加意向のあった短期大学 148 校^{※1}に在籍する 2 年生以上^{※2}（約 2.4 万人）。

※1 試行実施では、調査方法や質問項目などを整理・検証し、全国学生調査の制度設計の確立を目的とすることから、全大学（782 大学）に対して試行実施へ参加協力の可否等について意向確認を実施し、68.0%の大学から参加意向の回答があった。同様に全短期大学（309 校）にも意向確認を実施し、47.9%の短期大学から参加意向の回答があった。

※2 各大学・短期大学の標準修業年限における最終学年の学生を対象とした。

（2）調査方法

インターネット（WEB）調査（スマートフォン・PC・タブレット端末等で回答可能）

（3）質問項目

大学で受けた授業の状況、大学での経験とその有用さ、大学教育を通じて知識や能力が身に付いたか、平均的な 1 週間の生活時間等、全 45 問

（その他、自由記述（任意）1 問）

3. 回答状況

(1) 全体の回答状況

対象	対象校数	対象学部数 ※短大においては 学科数	対象学生数 ※短大においては最終学年のみ		有効回答者数 ※短大においては最終学年のみ		回答率
			2年生	4年生以上	2年生	4年生以上	合計
大 学	532校	2,083学部	462,252	488,595	51,502 (11.1%)	49,570 (10.1%)	10.6%
うち基準※合致	279校 (52.4%)	660学部 (31.7%)	201,323 (43.6%)	216,481 (44.3%)	37,708 (73.2%)	36,757 (74.2%)	17.8%
短期大学	148校	294学科	24,376		6,805		27.9%
@うち基準※合致	60校 (40.5%)	93学科 (31.6%)	7,502 (30.8%)		4,758 (69.9%)		63.4%
合計	680校	2,377 学部・学科	975,223		107,877		11.1%
うち基準※合致	339校 (49.9%)	753学部 ・学科 (31.7%)	425,306 (43.6%)		79,223 (73.4%)		18.6%
(参考：第2回試行実施結果)							
大 学	582大学	2,117学部	949,482人		112,341人		11.8%
集計基準 合致学部	328大学 (56.4%)	776学部 (36.7%)	461,162人 (48.6%)		84,486人 (75.2%)		18.3%
短期大学	157校	304学科	25,433		7,031		27.6%
集計基準 合致学部	55校 (35.0%)	85学科 (28.0%)	7,932 (31.2%)		4,674 (66.5%)		58.9%

※学部単位で「対象学生数が、①60人以上80人未満のとき、有効回答者数30人以上、②80人以上200人未満のとき、有効回答者数40人以上、③200人以上600人未満のとき、有効回答者数50人以上、④600人以上のとき、有効回答者数60人以上、⑤60人未満のとき、有効回答率50%以上」を集計基準として設定。

＜集計基準について＞

本調査の集計基準は、各大学・短期大学の学部・学科の回答としての代表性が損なわれないよう設定したものである。そのため、全体・設置者別・学年別の回答状況については学生から得られた全ての回答を集計に含めることとした。一方で、学部規模別・学部分野別の回答状況については、集計基準に合致した学部・学科の回答のみを集計した。(全体の回答状況以外のデータについては別添の資料編に示す。)

※本基準は、学部・学科の規模が60人未満の場合、50%の有効回答率を必要としたため、小規模の学部・学科が基準を満たせず、別添資料編に示したデータについてはこうした学部・学科の特徴が反映されていない可能性がある。

(2) 大学の回答状況

<設置者※別の回答状況>

区分	対象大学数	対象学部数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
国立	72大学	442学部	178,574人	23,097人	12.9%
公立	70大学	188学部	54,795人	8,025人	14.6%
私立	390大学	1,453学部	717,478人	69,950人	9.7%

※人数については、学部2年生と最終学年の在籍者数の合計

<大学規模※別の回答状況>

大学規模	対象大学数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
2,000人以上	154大学	683,620人	59,405人	8.7%
2,000人未満 1,000人以上	96大学	135,789人	18,412人	13.6%
1,000人未満 500人以上	114大学	82,087人	13,389人	16.3%
500人未満	168大学	49,351人	9,866人	20.0%

※人数については、学部2年生と最終学年の在籍者数の合計

<学部規模※別の回答状況>

学部規模	対象学部数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
800人以上	284学部	371,852人	27,197人	7.3%
800人未満 400人以上	585学部	331,459人	35,703人	10.8%
400人未満	1,214学部	247,536人	38,172人	15.4%

※人数については、学部2年生と最終学年の在籍者数の合計

<有効回答率別の大学数・学部数>

有効回答率	対象大学数
80%以上	4大学
60%以上80%未満	13大学
40%以上60%未満	25大学
20%以上40%未満	87大学
10%以上20%未満	165大学
10%未満	238大学

有効回答率	対象学部数
80%以上	18学部
60%以上80%未満	34学部
40%以上60%未満	81学部
20%以上40%未満	270学部
10%以上20%未満	507学部
10%未満	1173学部

（３） 短期大学の回答状況

<設置者※別の回答状況>

区分	対象大学数	対象学科数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
国立	—	—	—	—	—
公立	9大学	23学科	1,683人	373人	22.2%
私立	139大学	271学科	22,693人	6,432人	28.3%

※人数については、最終学年の在籍者数の合計

<短期大学規模※別の回答状況>

短大規模	対象校数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
400人以上	5校	2,735人	866人	31.7%
400人未満 200人以上	38校	9,958人	2,065人	20.7%
200人未満 100人以上	60校	8,734人	2,893人	33.1%
100人未満	45校	2,949人	981人	33.3%

※人数については、最終学年の在籍者数の合計

※短期大学においては、規模が小さく、有効回答者数が少ないことから、短期大学規模別のみ作成した。

<有効回答率別の短期大学数>

有効回答率	対象校数
80%以上	11校
60%以上80%未満	18校
40%以上60%未満	17校
20%以上40%未満	37校
20%未満	65校

4. 質問項目ごとの回答内容

＜各質問項目の回答選択割合＞

（注１）回答選択の実数については、別添「令和４年度「全国学生調査（第３回試行実施）」結果【資料編】」（以下、本資料において「別添資料編」と記載）参照

（注２）各回答の割合は、小数点第三位で四捨五入した上でパーセント表示しており、複数の回答の割合を合算した数値は、各回答のパーセント表示の和と必ずしも一致しない。

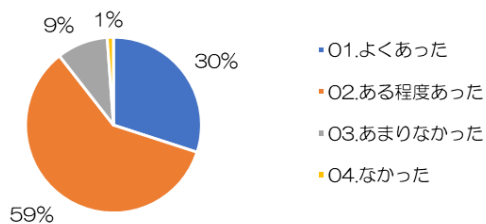
【大学】

問１ 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。

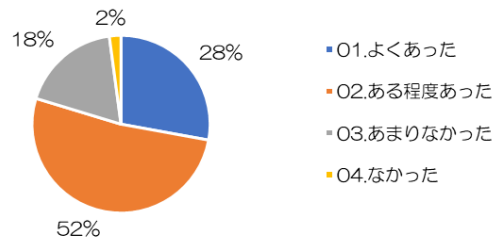
授業内容の意義や必要性の説明（89%）、授業時間外に行うべき学習の指示（80%）等については、「よくあった」、「ある程度あった」という割合が高かった。

適切なコメントが付された提出物の返却（54%）、ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導（53%）については半数程度であった。

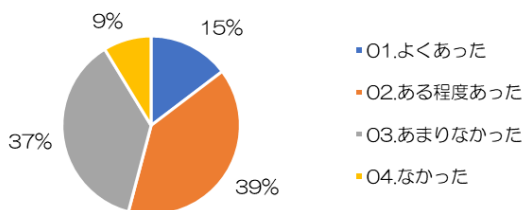
Q4 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれる。



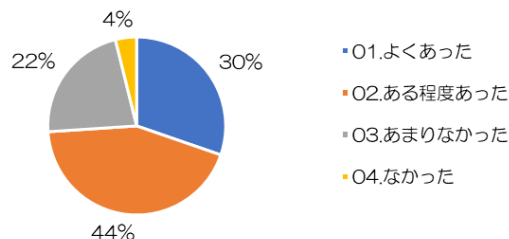
Q5 予習・復習など授業時間外に行うべき学習の指示される。



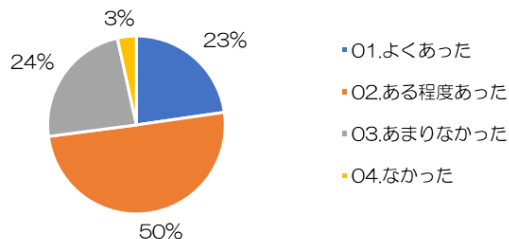
Q6 課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。



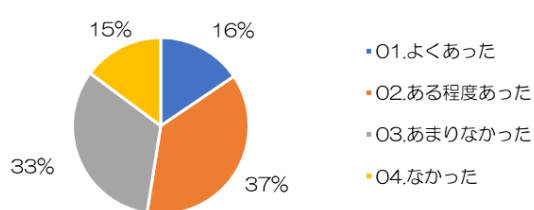
Q7 グループワークやディスカッションの機会がある。



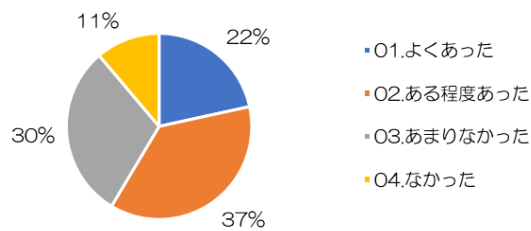
Q8 質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある。



Q9 ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。



Q10 受講者数が概ね20名以下の少人数で実施される授業の機会がある。

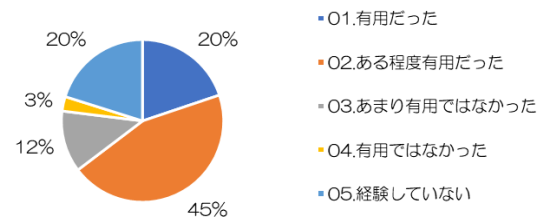


問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。

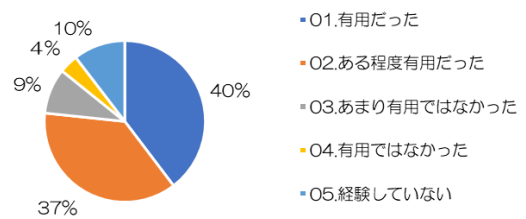
卒業論文・卒業研究・卒業制作などの教育（77%）、図書館等を活用した自主学習（81%）等については、「有用だった」、「ある程度有用だった」という割合が高かった。

インターンシップ（5日間以上）（81%）や、海外留学・海外研修（90%）、オンライン留学（87%）等の海外留学・海外研修に関する項目では、「経験していない」という割合が高かった。¹

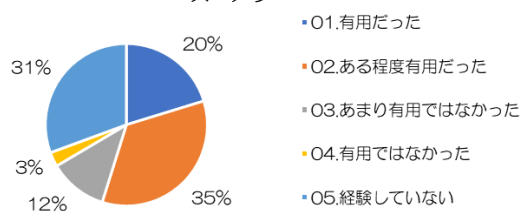
Q11 大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目



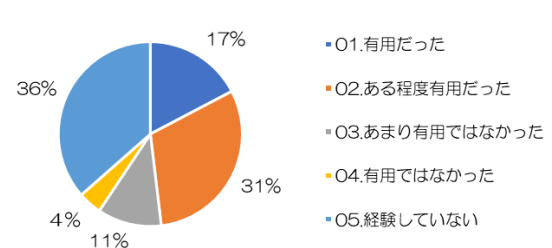
Q12 卒業論文・卒業研究・卒業制作などの教育（最終学年生のみ）



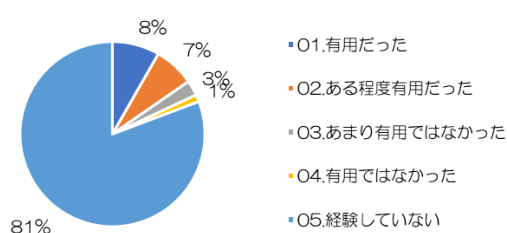
Q13 授業時間以外で、教員に質問・相談するオフィス・アワー



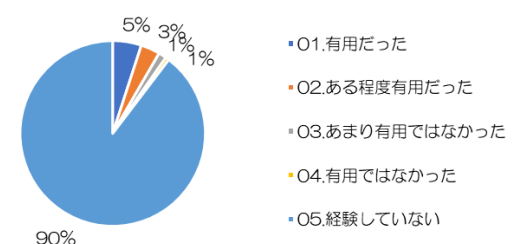
Q14 キャリアに関する科目、キャリアカウンセリング



Q15 インターンシップ（5日間以上）

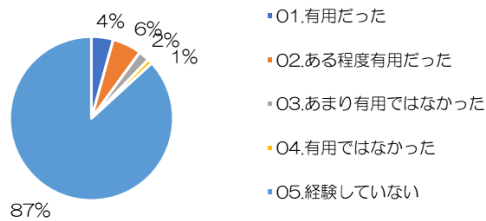


Q16 海外留学・海外研修（短期留学も含む）

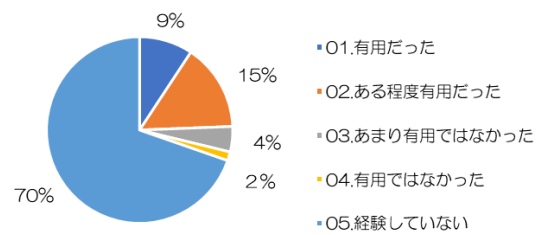


¹ インターンシップや海外留学・海外研修、学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会等について「経験していない」とする回答の割合が高いことについては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大等も背景にあるものと考えられる。

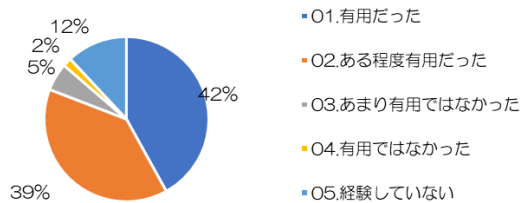
Q17 海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学等）



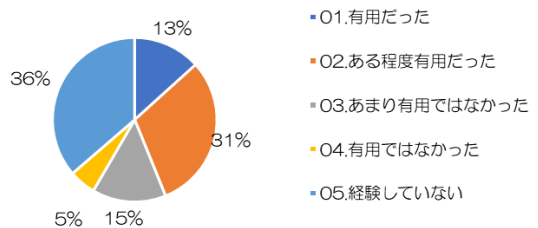
Q18 学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会



Q19 図書館やラーニングスペースなど大学施設を活用した自主的な学習



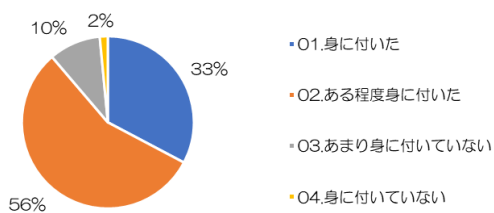
Q20 主に英語で行われる授業の履修（語学科目を除く）



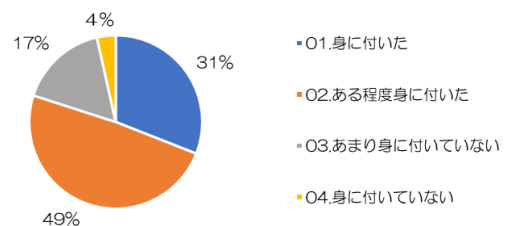
問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか。

専門分野に関する知識・理解（89%）、社会的責任や倫理観（85%）、多様な人々の理解を得ながら協働する力（81%）等について、「身に付いた」、「ある程度身に付いた」という割合が高かったが、外国語を読む力・書く力（43%）、聞く力・話す力（39%）については割合が低かった。

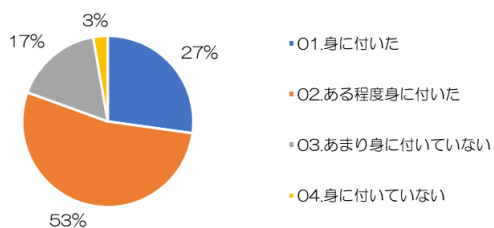
Q21 専門分野に関する知識・理解



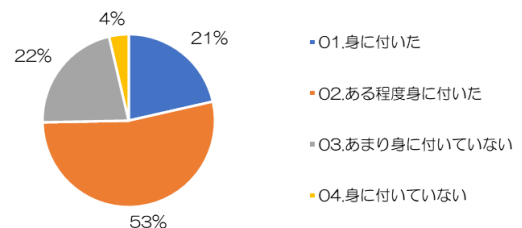
Q22 将来の仕事につながるような知識・技能

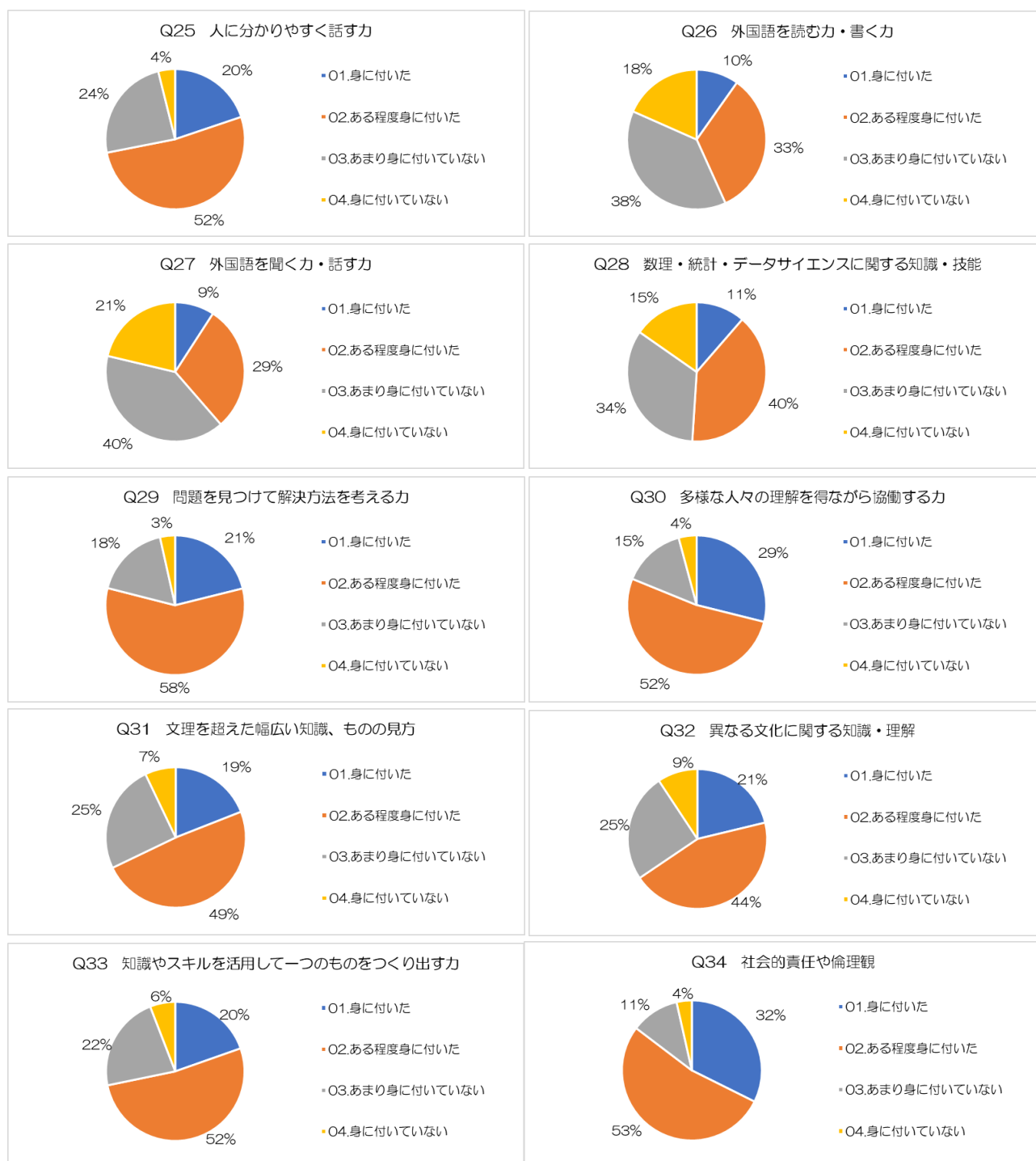


Q23 文献・資料を収集・分析する力



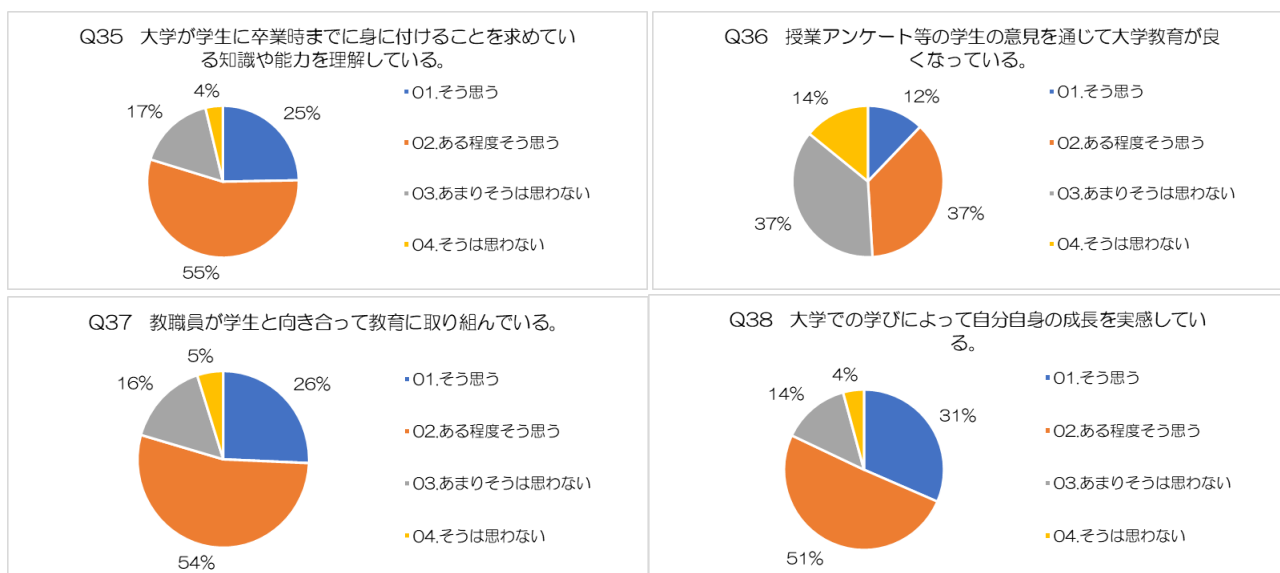
Q24 論理的に文章を書く力





問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

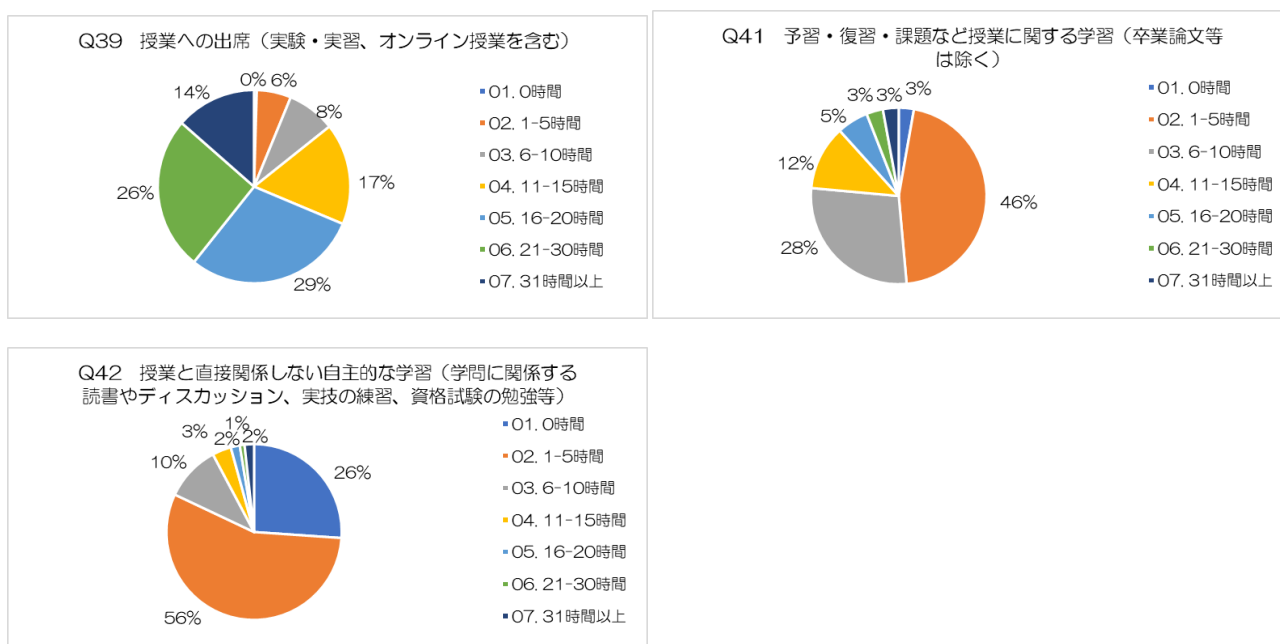
大学での学びによって自分自身の成長を実感している（82%）、大学が学生に卒業時までに身に付けることを求めている知識や能力を理解している（80%）等について、「そう思う」、「ある程度そう思う」という割合が高かったが、授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている（49%）については半数程度となった。



問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

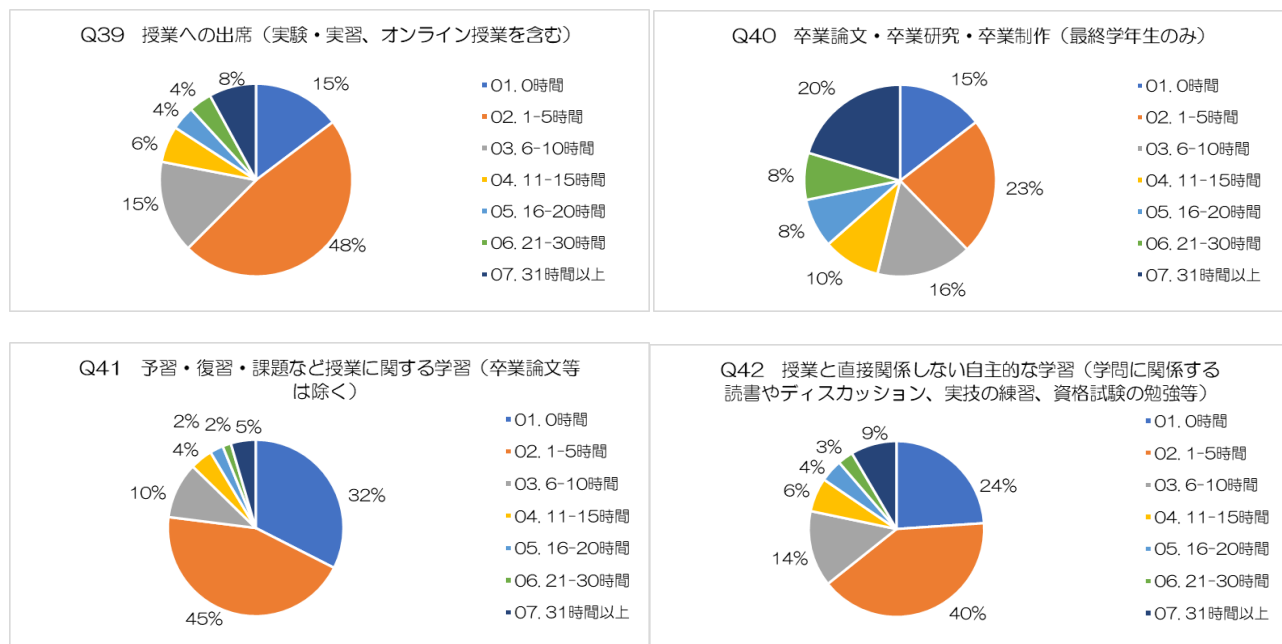
授業への出席は2年生で16時間以上が69%、4年生以上で5時間以下が62%。卒業論文等は4年生以上で16時間以上が37%。授業に関する学習は5時間以下が2年生で49%、4年生以上で77%。²授業と直接関係しない自主的な学習は5時間以下が2年生で82%、4年生以上で64%。部活動／サークル活動は0時間が66%。アルバイト等は11時間以上が45%。

◆2年生（Q39、Q41、Q42について）



² Q39「授業への出席」、Q40「卒業論文・卒業研究・卒業制作」Q41「予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く」Q42「授業と直接関係しない自主的な学習（学問に関する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）」については、調査について質問した自由記述欄において「4年生になってからは卒論だけで、全く授業がない」といった回答や、「3年でほぼ授業は終わる」といった回答が多くみられたことから、学年別のデータを掲載している。（その他の学年別データは別添資料編に掲載）

◆ 4年生以上（Q39、Q40、Q41、Q42について）

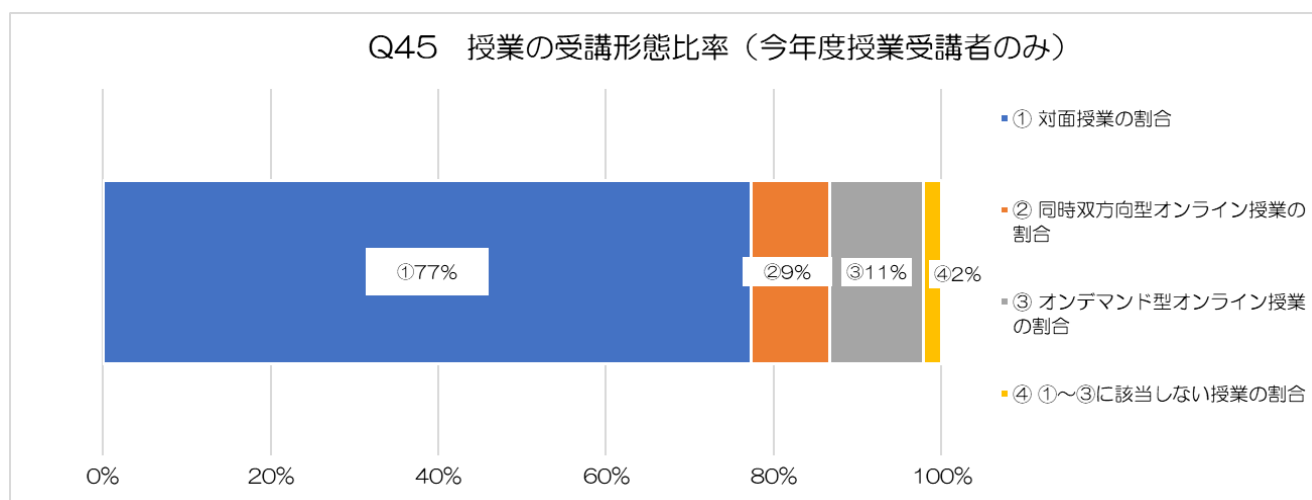


◆ 2年生・4年生以上合計の回答状況（Q43、Q44について）



問6 令和4年度に受けた授業の受講形態のうち、次の割合はそれぞれどれくらいでしたか。

対面授業が77%、同時双方向型オンライン授業が9%、オンデマンド型オンライン授業が11%、その他実習等が2%であった。令和4年度に授業を受講していない学生は回答対象外とした。



なお、学生の「①対面授業の割合」への回答状況は以下のとおりであった。

	0割以上 ～2割未満	2割以上 ～4割未満	4割以上 ～6割未満	6割以上 ～8割未満	8割以上 ～10割	合計
回答数	4,443	4,867	8,820	12,971	62,196	93,297
回答割合	5%	5%	9%	14%	67%	100%

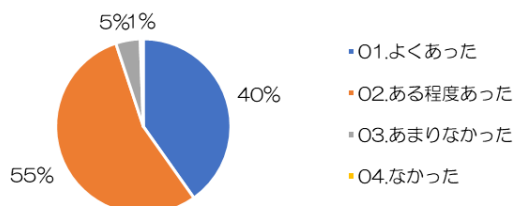
※上表のうち対面授業の割合が10割と回答した学生は、対面授業の割合に回答した者のうち、36%（33,496名）であった。

【短期大学】

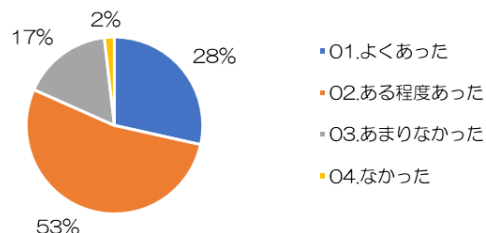
問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどれくらいありましたか。

授業内容の意義や必要性の説明（95%）、グループワークやディスカッションの機会（87%）等、全体的に「よくあった」、「ある程度あった」という回答割合が高かった。

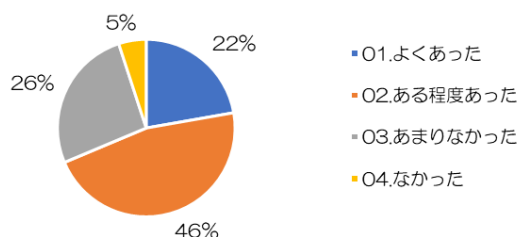
Q4 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれる。



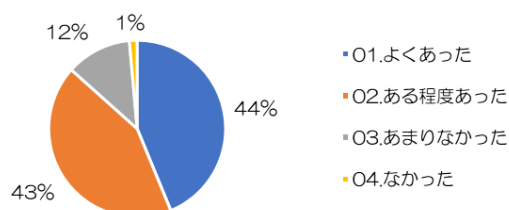
Q5 予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される。



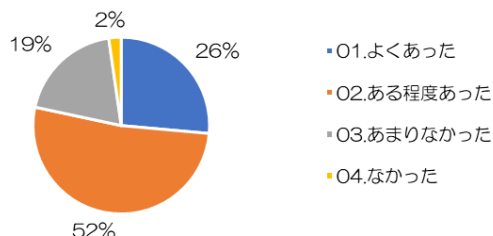
Q6 課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。



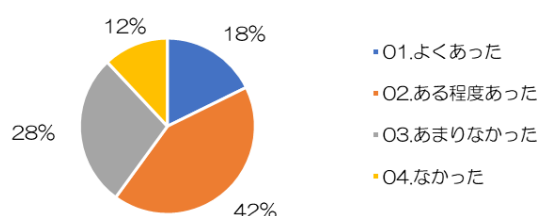
Q7 グループワークやディスカッションの機会がある。



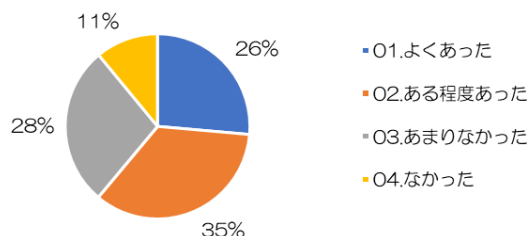
Q8 質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある。



Q9 ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。



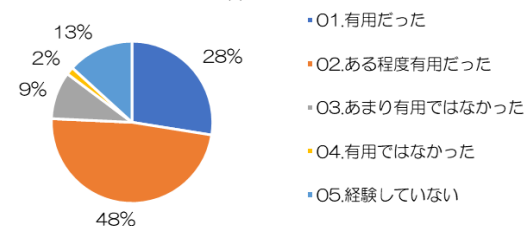
Q10 受講者数が概ね20名以下の少人数で実施される授業の機会がある。



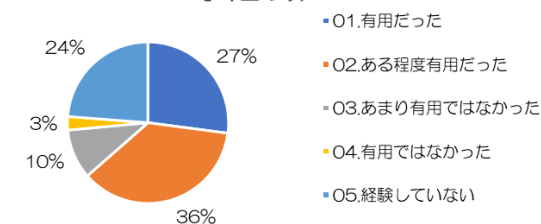
問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。

大学での学習方法を学ぶ科目（76%）、授業時間外の教員への質問・相談（70%）、等については、「有用だった」、「ある程度有用だった」という割合が高かったが、海外留学・海外研修（90%）、オンライン留学等（87%）等の海外留学・海外研修に関する項目で「経験していない」という割合が高かった。³

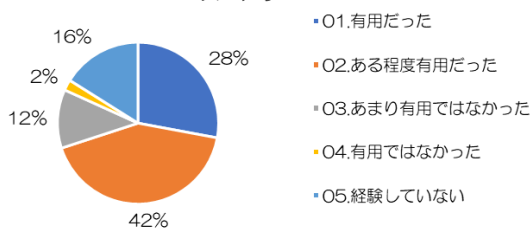
Q11 大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目



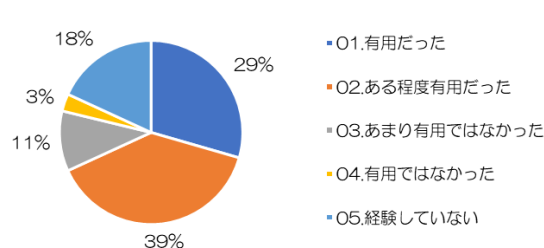
Q12 卒業論文・卒業研究・卒業制作などの教育（最終学年生のみ）



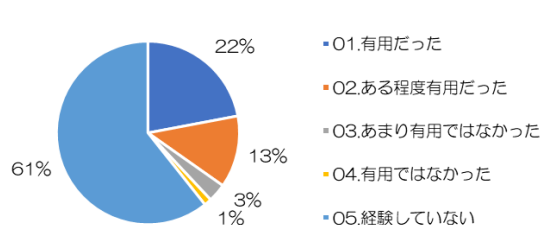
Q13 授業時間以外で、教員に質問・相談するオフィス・アワー



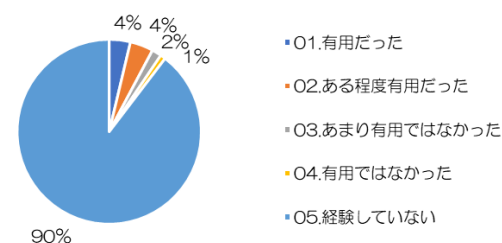
Q14 キャリアに関する科目、キャリアカウンセリング



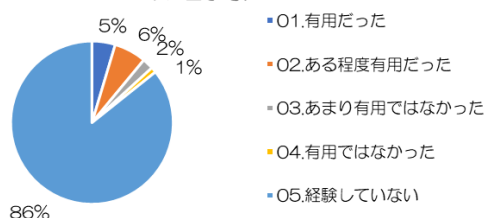
Q15 インターンシップ（5日間以上）



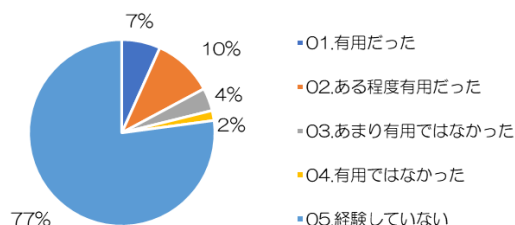
Q16 海外留学・海外研修（短期留学も含む）



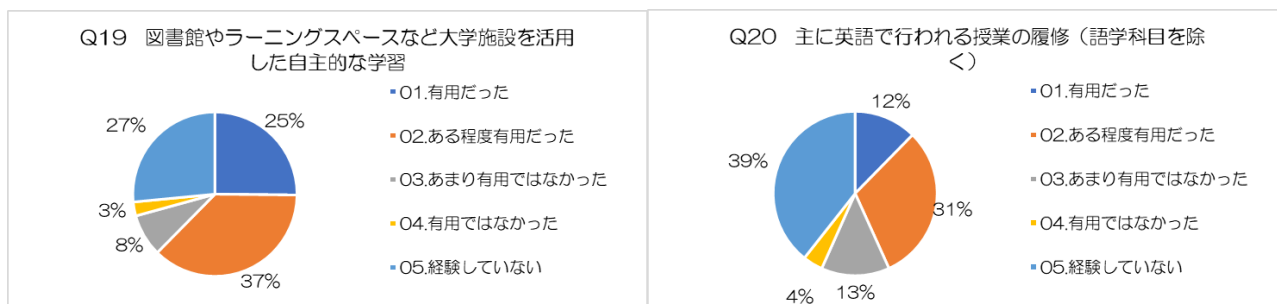
Q17 海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学等）



Q18 学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会

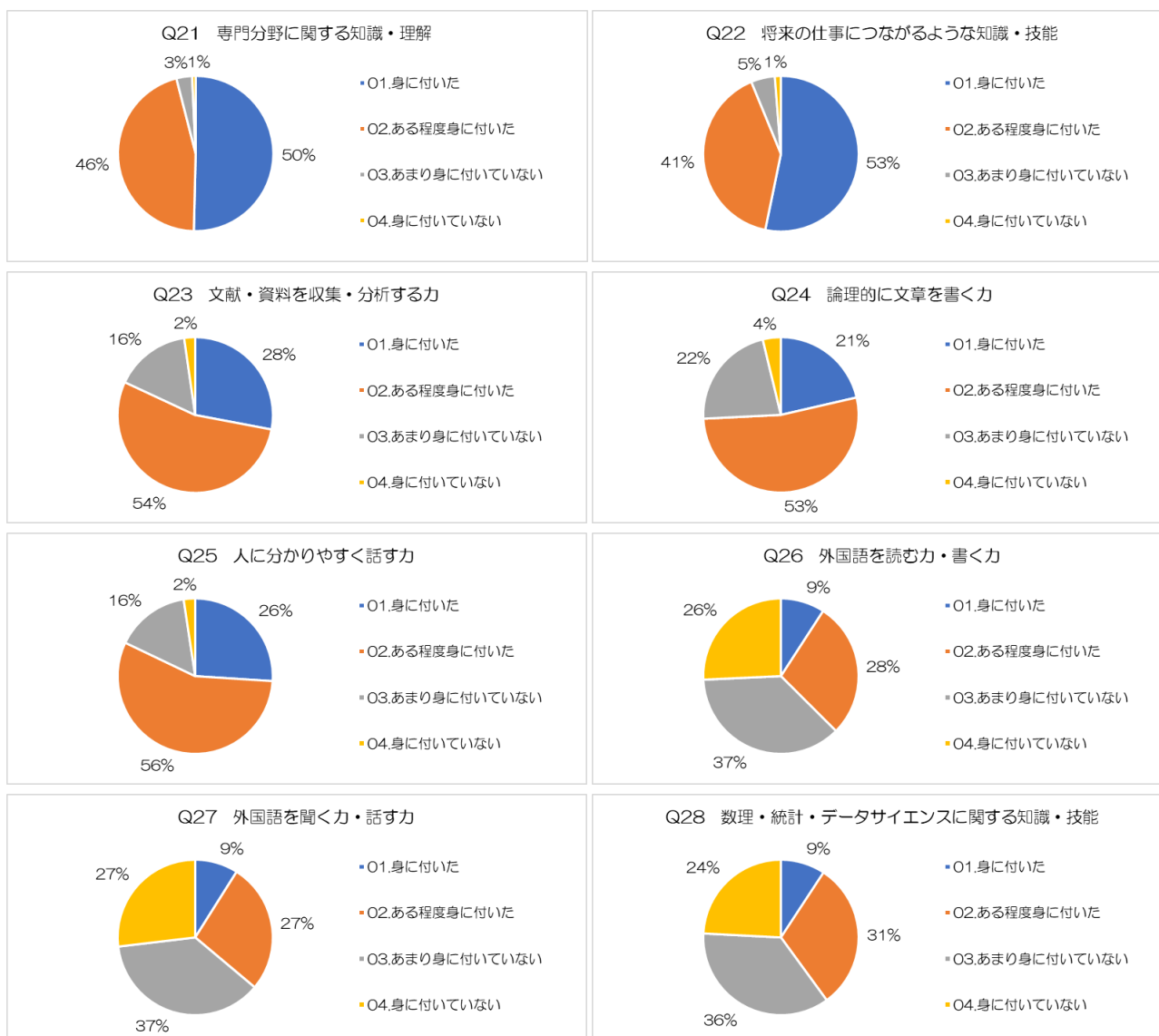


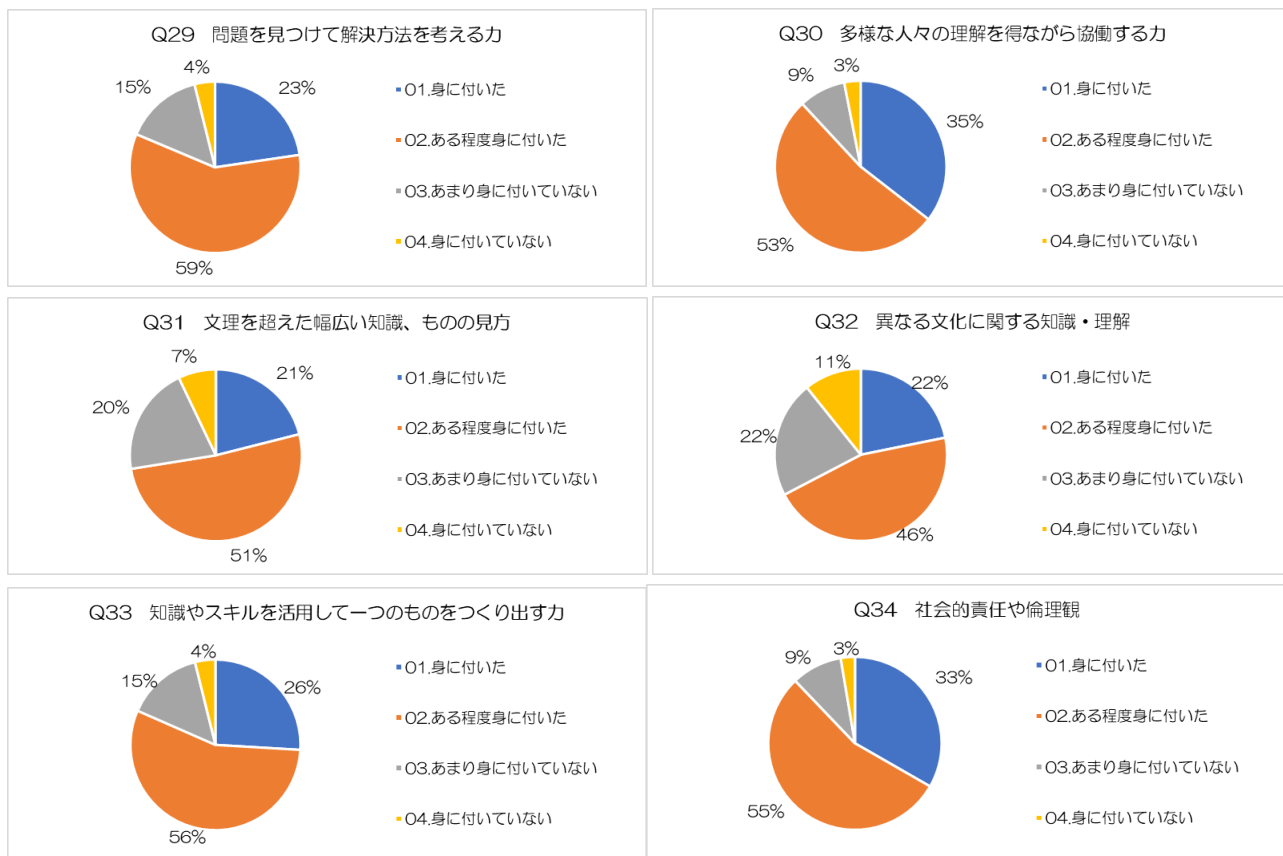
³ 海外留学・海外研修を「経験していない」とする回答の割合が高いことについては、大学と同様に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大等も背景にあるものと考えられる。



問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力が身に付いたと思いますか。

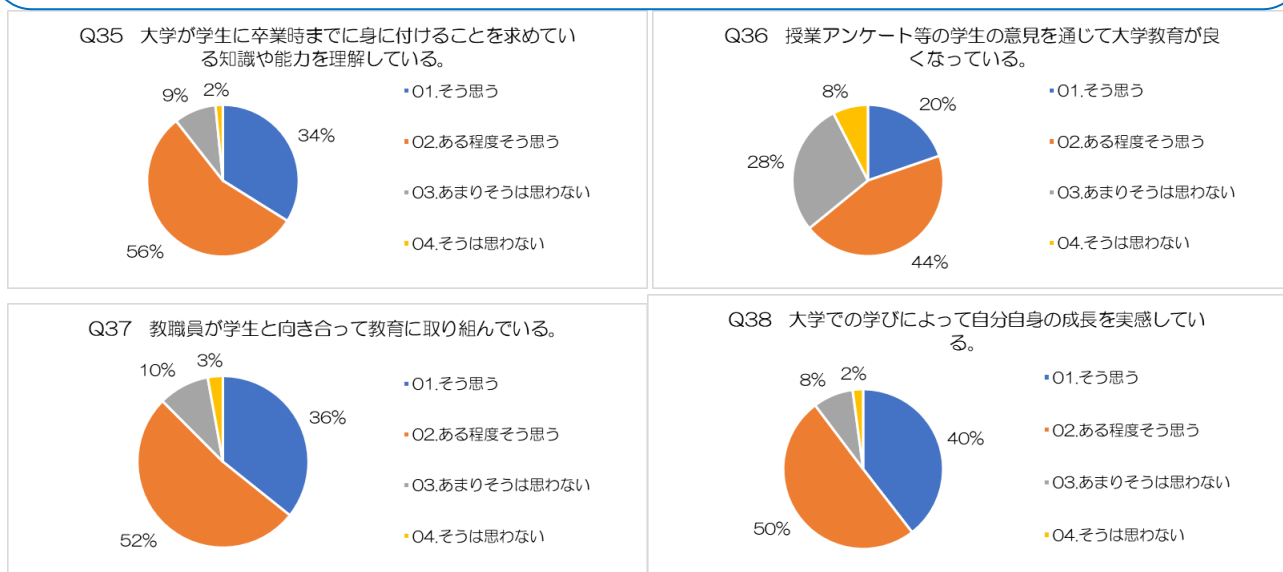
専門分野に関する知識・理解（96%）、将来の仕事につながるような知識・技能（94%）等については、「身に付いた」、「ある程度身に付いた」という割合が高かったが、外国語を読む力・書く力（37%）、聞く力・話す力（36%）については割合が低かった。





問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

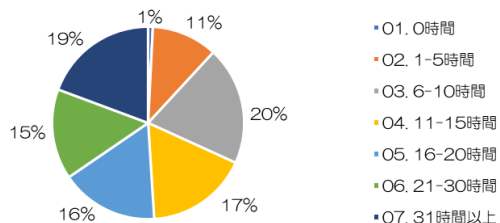
大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている知識や能力を理解している（90%）、大学での学びによって自分自身の成長を実感している（90%）等については、「そう思う」、「ある程度そう思う」という割合が特に高く、他の項目についても比較的高い割合となった。



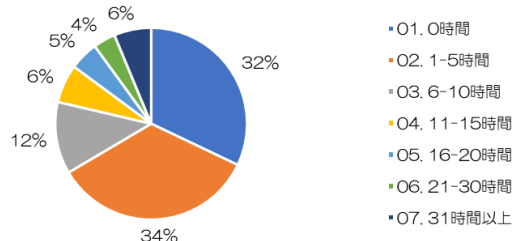
問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

授業への出席は16時間以上が50%、5時間以下が12%。卒業論文等は16時間以上が15%。授業に関する学習は5時間以下が75%。授業以外の学習は5時間以下が81%。部活動／サークル活動は0時間が84%。アルバイト等は11時間以上が48%。

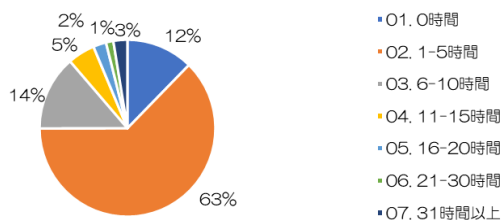
Q39 授業への出席（実験・実習、オンライン授業を含む）



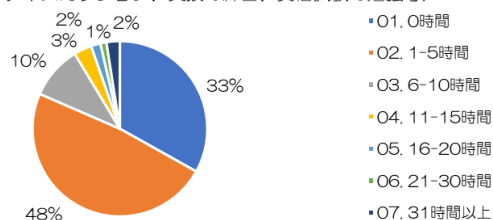
Q40 卒業論文・卒業研究・卒業制作



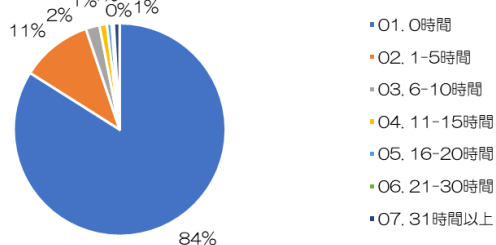
Q41 予習・復習・課題など授業に関する学習（卒業論文等は除く）



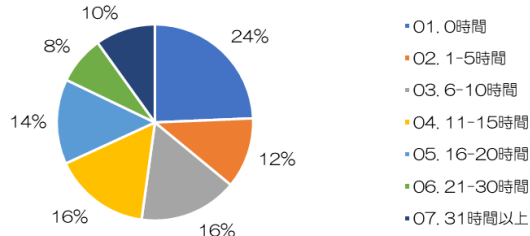
Q42 授業と直接関係しない自主的な学習（学問に関する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）



Q43 部活動／サークル活動

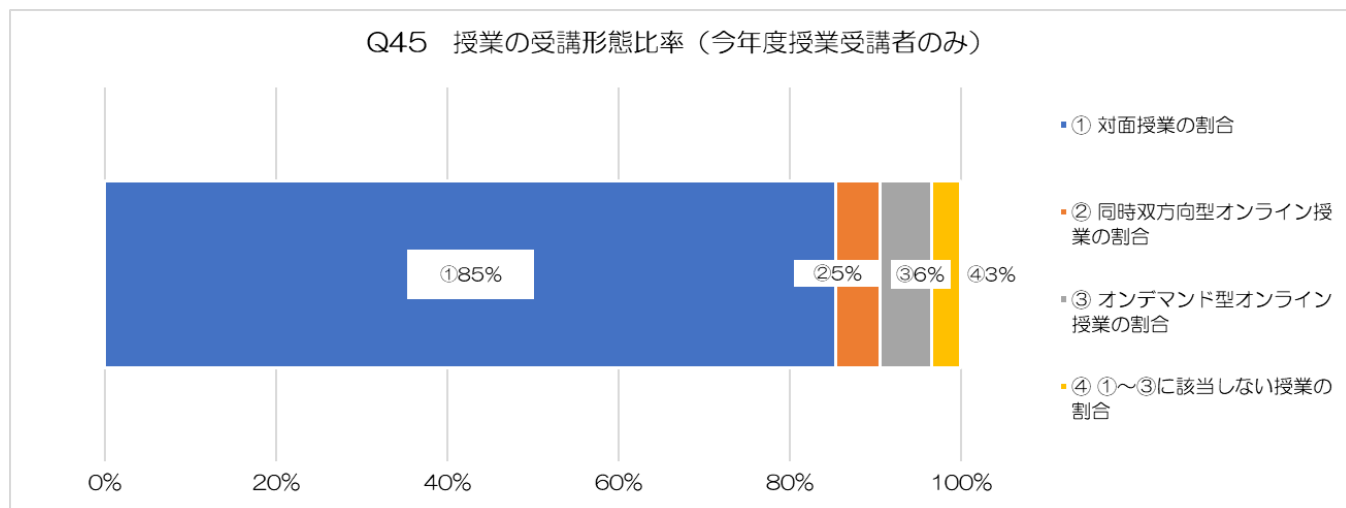


Q44 アルバイト／定職



問6 令和4年度に受けた授業の受講形態のうち、次の割合はそれぞれどれくらいでしたか。

対面授業が85%、同時双方向型オンライン授業が5%、オンデマンド型オンライン授業が6%、その他実習等が3%であった。令和4年度に授業を受講していない学生は回答対象外とした。



なお、学生の「①対面授業の割合」への回答状況は以下のとおりであった。

	0割以上 ～2割未満	2割以上 ～4割未満	4割以上 ～6割未満	6割以上 ～8割未満	8割以上 ～10割	合計
回答数	92	121	416	800	5,031	6,460
回答割合	1%	2%	6%	12%	78%	100%

※上表のうち対面授業の割合が10割と回答した学生は、対面授業の割合に回答した者のうち、48%（3,131名）であった。

全体的な結果の整理に加え、各大学・短期大学における把握・分析に資するよう、以下の項目について集計を行い、別添資料編にまとめた。

- 設置者別の回答状況
- 学部・学科規模別の回答状況（集計基準合致学部）
- 学部・学科分野別の回答状況（集計基準合致学部）
- 学年別の回答状況（大学のみ）
- 設置者別と学部等規模別の回答状況の組み合わせ（集計基準合致学部）

5. 結果を踏まえた課題等

(1) 調査対象・時期・回答率について

今回調査は、大学での学修経験や身に付いた能力に関する学生の自己認識を確認する観点から、第2回試行実施と同様、大学2年及び修業年限の最終学年の大学生並びに最終学年の短期大学生を対象に調査を実施した。また、調査実施時期は、回答率が高かった第1回と同じ11月下旬からとし、1月下旬までの期間から各大学が1か月以上の期間を選んで実施した。

回答率は、短期大学については27.9%であり、前回調査(27.6%)と同程度であったが、大学については10.6%となり、第1回(27.3%)、第2回(11.8%)を下回る結果となった。さらに、大学においては、参加大学の約46%(255大学)、参加学部の約68%(1423学部)から集計基準に達する回答数を得られなかった。回答率が低い要因については、調査時期、質問項目数の多寡、学生への周知方法、第2回試行実施からの間隔(第2回は令和4年2月に実施)などの影響が考えられる。本格実施に向けては、前述の項目の影響を分析するなど、有識者の意見も踏まえながら回答率向上の方策を検討する必要がある。

(2) 回答方法について

インターネット(WEB)調査として実施したが、学生の回答方法はスマートフォン・PCがほとんどであり、自由記述にも回答方法に関する意見はほぼ見られなかったことから、回答方法は適切だったと考える。また、第2回に引き続き英語表記の回答フォーマットを用意したところ、約200件の回答が見られた。

(3) 質問項目について

第2回試行実施ではオンライン授業に対する評価をはじめとする新型コロナウイルス感染症の影響等を把握するため質問項目を60問に増やして実施したところ、平均回答時間が前回よりも長くなる傾向が見られ、自由記述においても「質問数が多い」という意見が多くみられた。そのため今回調査では、学生の回答負担、回答率に及ぼす影響等も踏まえて、質問項目を精選し45問に減らして実施した。

その他、自由記述では、「『大学在学中の経験が有用か』という質問では回答しにくい」、「『大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている知識や能力を理解している』の質問は大学とは教授のことを言っているのか、それとも進路指導の職員の方々のことを言っているのか主語をはっきりしてほしい」「割合を答える質問がわかりにくい」などの意見があったことに加え、前回同様「質問数が多い」という意見も多数寄せられたことから、質問項目数や質問内容の工夫・改善についても検討していく必要がある。

(4) 各項目の回答状況について

《大学》

【Q6】「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」

「あまりなかった」又は「なかった」と回答した割合は 46%と約半数であった。この項目については、自由記述においても「課題を提出したがフィードバックがなく、どこまで理解できているのか、何が間違っているのかがわからなかった」等の意見が散見されたが、学生が教員等から適切なフィードバックを受けられないことは、学修の成果を学修者が実感できる「学修者本位の教育」の実現という観点からも課題であると考えられる。

【Q26】「外国語を読む力・書く力」

【Q27】「外国語を聞く力・話す力」

「あまりに身に付いていない」又は「身に付いていない」と回答した割合がいずれも 6 割を超えていた。多くの大学において外国語が必修科目とされている中で、半数を超える学生が学修成果を実感できていないことが見てとれる。

【Q28】「統計などデータサイエンスの知識・技能」

この分野は、例えば「新しい資本主義のグランドデザイン及び実行計画 2022」（令和 4 年 6 月 7 日閣議決定）の中でも「全国の大学等において、A I ・データサイエンス・数理等の教育を強化し、文系、理系を問わずこれらを応用できる人材を育成する」ことが盛り込まれるなど、デジタル社会の読み・書き・そろばんとして重視される分野であるが、「あまり身に付いていない」又は「身に付いていない」と回答した割合が 49%と約半数であった。⁴

【Q36】「授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている」

「あまりそうは思わない」又は「そうは思わない」と回答した割合が 51%であり、過半数の学生は、授業アンケート等が大学教育の改善に生かされているという実感を持てていないことが明らかとなっている。

【Q38】「大学での学びによって自分自身の成長を実感している」

「そう思う」、「ある程度そう思う」と回答した割合は 82%であり、学生の約 8 割は大学教育を経て自らの成長を実感していることが明らかとなった。

【Q39】「授業への出席」 ※実験・実習、オンライン授業を含む

【Q48】「卒業論文・卒業研究・卒業制作」

【Q41】予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く

大学 2 年生は、授業への出席時間について、3 分の 2 以上の学生が週 16 時間以上、4 割の学生が週 21 時間以上であるなど、授業への出席時間が長い一方で、予習・復

⁴ 「統計などデータサイエンスの知識・技能」については学部分野別の差異が比較的大きく、理学・工学においては「身に付いた」「ある程度身に付いた」とする回答の割合が高い（別添資料編 76 頁参照）。

習・課題など授業に関する学習については週5時間以下の学生が約半数を占めている。これらの結果は前回調査結果と比較しても改善傾向が見られず、引き続き授業への出席時間に比して授業に関する学習時間が短くなっていることが明らかとなった。これは学期末の試験結果のみで単位認定が行われるなどの理由から学生が過剰な単位登録をしており、キャップ制が実質的に機能していないことなどが考えられるが、大学設置基準において1単位が45時間の学修を必要とする内容をもって構成されることを標準としている単位制度の趣旨に鑑みても大きな課題である。

また、最終学年の学生については、授業への出席時間は6割以上の学生が週5時間以下となっており、これに伴い、授業に関する学習も週5時間以下の学生が約8割を占めている。このように最終学年の学生は、授業への出席及び授業に関する学習時間が短い一方で、約3割の学生が卒業論文・卒業研究・卒業制作に週21時間以上、2割の学生が週31時間以上と多くの時間を費やしていることがわかる。しかしながら、最終学年の学生であっても、約4割の学生は卒業論文・卒業研究・卒業制作を行う時間が5時間以下であり、最終学年においては、学習時間が極めて短い学生も一定数いることが伺える。こうした状況の背景には、就職活動等による影響や上記で指摘したキャップ制が実質的に機能していないといった課題があるものと考えられる。

【Q45】「授業の受講形態比率」

第2回試行実施において令和2年度、令和3年度においては同時双方向型オンライン授業やオンデマンド型オンライン授業を多く受けている学生が多くいたことが明らかとなっていたが、今回調査においては、8割以上が対面授業であると答えた学生が67%を占めるなど、対面授業中心で大学の授業が行われていることが分かった。

《短期大学》

短期大学については、概ね大学と同様の傾向が見られたが、大学と比較して、全体として、短期大学の教育活動、短期大学での学びに対する肯定的な回答の割合が高い傾向にあった。

問1関係では、【Q6】「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」に関する「よくあった」「ある程度あった」は計68%であり、大学より14ポイント高かったほか、【Q7】「グループワークやディスカッションの機会がある」は計87%であり、大学より13ポイント高かった。

問2関係では、全体として短期大学による学生支援等の有用性を高く評価する回答が多く、肯定的な回答（有用だった、ある程度有用だった）の割合が、例えば【Q11】「大学での学修の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目」で76%（大学65%）、【Q13】「授業時間以外で、教員に質問・相談するオフィス・アワー」で70%（大学55%）、【Q14】「キャリアに関する科目、キャリアカウンセリング」で68%（大学48%）と、大学と比較して高い割合を示した。

問3関係では、【Q22】「将来の仕事につながるような知識・技能」が「身に付いた」「ある程度身に付いた」が計94%（大学80%）であり、職業教育の成果が評価されていると捉えることができる。

問4関係でも、全体として、短期大学の学生は、自らの成長や身に付けた知識・技能について、大学の学生と比較してより肯定的に評価していることが明らかになった。また、【Q36】「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」では「そう思う」または「ある程度そう思う」と回答した割合は64%と大学よりも15%高く、大学と比較してより学生の意見を踏まえた教学の改善を学生が実感できていることが見てとれる。

問5関係では、【Q41】「予習・復習・課題など授業に関する学習」が5時間以下の学生の割合が75%であり、【Q42】「授業と直接関係しない自主的な学習（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）」では5時間以下が81%を占め、予習・復習・課題など授業に関する学習時間の短さは大学と同様に課題であると言える。

《第2回試行実施との比較》

前回調査と同じ質問項目について回答割合を比較したところ、大学については、Q6 課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される（+8%）、Q7 グループワークやディスカッションの機会がある（+9%）、Q11 大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目（+13%）、Q19 図書館やラーニングスペースなど大学施設を活用した自主的な学習（+13%）の質問項目について「よくあった」「ある程度あった」、「有用だった」「ある程度有用だった」の割合が前回調査結果よりも高くなった。短期大学については、Q7 グループワークやディスカッションの機会がある（+14%）、Q11 大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目（+8%）、Q18 学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会（+9%）、Q19 図書館やラーニングスペースなど大学施設を活用した自主的な学習（+8%）の質問項目について「よくあった」「ある程度あった」、「有用だった」「ある程度有用だった」の割合が前回調査結果よりも高くなった。これらは、前回調査時と比較して今回調査時においては、対面授業が増加したことなどが影響した可能性があると考えられる。

一方で、予習・復習・課題など授業に関する学習時間については、授業への出席時間はほとんど変化していないにもかかわらず、週5時間以下の学生が第2回試行実施と比較して増加している傾向が見てとれる（大学2年生：41%→49%、短期大学：65%→75%）。これは、前回調査時と比較して今回調査時において、レポート等の課題が多い傾向にあったオンライン授業が減少し、その結果、授業に関する課題に取り組む時間が減少した可能性が考えられる。

（5）調査結果の取扱いについて

今回調査は、適切な調査方法や質問項目などを整理・検証することを目的に、試行という位置付けで実施したため、公表内容は「全国学生調査の実施に関する有識者会議」における検討結果に基づき、全体の回答状況及び学部・学科の回答を設置者別、学部・学科規模別、学部・学科分野別、学年別（短期大学を除く）、設置者別と学部等規模別の組み合わせにより整理したものとした。

なお、集計基準の設定や学部規模の区分方法、その他の組み合わせ方法等については、

今回の試行実施における大学・学部ごとの回答状況（回答数、回答率）の傾向を勘案しつつ、引き続き有識者から意見を聴取し検討する。

また、前回調査と同様、各大学において調査結果を教育の改善に活用できるよう自大学の回答のみを個別に送付したが、本格実施では、有識者会議において「大学・学部単位で調査結果を公表すること、その際、結果の数値の羅列だけでなく、本調査の結果の見方等と併せて、結果に関する各大学の取組を記載することにより、大学・学部間での順位付けではなく、各大学の強み・特色の発信につながるよう特段の工夫を行う」とされたことも踏まえ、各大学における学修成果や教育成果を保証する観点からも、大学・学部単位の結果や教学の改善に関する取組を公表することにより、高等教育全体の質の向上を促すとともに、進学を希望する生徒等の進路選択のための有益な情報となるよう、有識者の意見を聴取しながら検討を進めることとする。

（６）今後の対応

文部科学省としては、大学における「学修者本位の教育への転換」をするための施策の検討の参考資料とするとともに、今回明らかになった調査実施上の課題等を踏まえ、「全国学生調査」の本格実施に向けた検討を進める。

＜担当＞	高等教育局高等教育企画課高等教育政策室
室長	柿澤 雄二（内線 2473）
課長補佐	花田 大作（内線 3330）
係長	渡辺 真澄（内線 3332）
専門職	平野 慎（内線 3332）
電話	： 03-5253-4111（代表）、03-6734-3332（直通）